第一次世界大戦後のベルギーにおいて建設された 田園郊外の理念

Intention of Garden Suburb Planning in Belgium for Several Years after the First World War

平岡直樹* 佐々木邦博** 伊藤精悟**
Naoki HIRAOKA Kunihiro SASAKI Seigo ITOU

摘要：第一次世界大戦後、ベルギーではイギリス等の影響のもと、数多くの田園郊外が建設された。本研究では、田園郊外の建設を積極的に進めたベルギー地方自治体連合が1920年に主催した低廉住宅全国会議と、1925年に発表した「田園都市に関する特別基準法」案の分析を行い、ベルギーにおける田園郊外建設の経緯とその理念を明らかにすることを目的とする。その結果、第一次世界大戦後すぐの時期には戦災復興のため、土地所有の制限や協同組合方式が社会秩序維持に有効で経済的である面から注目されたこと、復興後は快適な住宅地が求められるようになり、低層低密の構成の手法の普及が計られるようになったことが明らかになった。

1. 研究の目的

イギリスで生まれた田園都市運動は20世紀の初頭にヨーロッパ大陸諸国へ伝わった。ベルギーにおいては第一次世界大戦が終結するまで、田園都市及び田園郊外の建設はほとんどなかった。第一次世界大戦後の1919年から1930年頃にかけて、都市化の顕著であった首都ブリュッセルの郊外部を中心に数多くの田園郊外が建設された¹⁾。その直接の契機となったのが、戦争による家屋の破壊と建設の中断による危機的な住宅不足であった。これに対処するために1919年に低廉住宅公社が設立され、政府の援助により住宅建設が促進され始めた。地方自治体の公共事業行政の責任者等による団体であるベルギー市町村連合は、低廉住宅公社と共に田園郊外建設を積極的に進めた。田園郊外の建設は1920年から1925年の6年間にほとんどが始められるが、それ以降には新しい場所に着手されることはほとんどなくなった²⁾。

本研究では、ベルギー市町村連合が1920年に主催した低廉住宅全国会議における論議、そして、同連合が1925年に発表した「田園都市に関する特別基準法」案を取り上げる。この議論のあった2つの時期の動向をそれぞれ分析することにより、ベルギーにおける田園都市論の受容と田園郊外建設の経緯、理念や手法の変化を明らかにすることを目的とする。日本と同様に田園都市論を受け入れ、独自の展開と実践をみたベルギーの状況を考察することは、ヨーロッパの主要な国々で生まれた都市計画理念や手法がどのように周辺諸国へ伝播し、また進展していったかを把握する手掛かりとして意義あることである。

この1920年の低廉住宅全国会議については、それ以後のベルギーにおける田園都市運動と田園郊外建設の方向性を定めたものとして重要視され、しばしばその名が挙げられる³⁾。しかし、スメッツ(M. SMETS)が概略について触れている⁴⁾他は、詳細に内容まで検討した研究は見られない。また、「田園都市に関する特別基準法」案についても詳細な分析を行った研究は見られない。

2. ベルギー市町村連合

ベルギー市町村連合(Union des Villes et Communes belges)は、第一次世界大戦が勃発する直前の1913年にヘント(Gent)市で行われた国際都市計画会議の折りに、市町村の土木や建築、都市計画等の公共事業行政の担当者等により結成された

団体である。低廉住宅公社(Société Nationale des Habitations et Logements à Bon Marché)と共に田園郊外建設を積極的に推奨し、地方議会等にも大きな影響を与えた。1920年には低廉住宅全国会議(Conférence nationale de l'habitation à bon marché)をブリュッセルで開催している。この会議で様々な考えを持った為政者や行政の担当者、技術者等の意見が集約して田園都市論を導入することが公認され、1920年代の施策の方向性を決めたとされる⁵⁾。1925年には、田園郊外における都市計画や建築基準の策定例として「田園都市に関する特別基準法」案を発表している。また、第一次世界大戦後の復興時には建築資材不足を各自治体の範囲を越えて把握し、全国での建設工事が円滑に進むように建築資材の配分調整も行っている。

3. 低廉住宅全国会議における論議

低廉住宅全国会議は1920年4月24～26日の3日間にわたり、エミール・ヴィンク(Émile VINCK, 1870-1950)が発起人となってブリュッセルで開催された。エミール・ヴィンクは弁護士、区議出身の上院議員(後に副議長)で、ベルギー市町村連合の主導者、共同創設者であり、低廉住宅公社の初代代表でもある。そして、当時の労働党出身の産業及び労働大臣ジョゼフ・ウォーテルス(Joseph WAUTERS, 1875-1929)はこの会議を後援している。

ベルギー市町村連合から低廉住宅全国会議の報告書⁶⁾が出されており、内容は会議のプログラムや6人の報告、その内5人の報告に対する論議の議事録等である。議事録では、拍手や笑い、やじ等まで細かく記載され、会議進行の様子が生々しく伝えられている。参加者数は不明であるが、議長はヴィンクが務め、討議での発言者には市町村の助役や技術者等27人の名前が記録されている。報告書の目次を表-1に示した。

(1) 会議内容の概略

大臣のウォーテルスが会議の冒頭でスピーチを行い、「都市を郊外に拡げ、労働者に太陽や緑に囲まれた環境で住居や家庭を与えることが理想的で、イギリスやフランスでなされている田園都市の考えを普及させるべきである」と述べている⁷⁾。

ド・グロンケルは、戦争の被害や家賃の高騰、土地投機、建築資材の不足等によって特に都市部での住宅難が顕著になっていること、住宅建設に必要な労働力が国外へ流出していること、映画

*岐阜大学大学院連合農学研究科(信大所属) **信州大学農学部森林科学科

表－１ 低廉住宅全国会議報告書の目次

	ページ
■プログラム (Programme)	1～12
■報告 (Rapports introductifs)	
住宅不足をどのように把握するか	1～6
Comment déterminer le déficit des logements	
シャルル・ド・グロンケル (Charles de GRONCKEL)	
(イクセル区役所社会衛生部長)	
不動産問題	I 1～8
Le problème foncier	
ラファエル・ヴォルウィルゲン (Raphael VERWILGHEN)	
(都市計画家、内務省被災地域局長)	
財政問題	II 1～18
Le problème financier	
ヴァン・デン・ベンプト (A. VAN DEN BEMPT)	
(ブリュッセル市役所市有地管理部長)	
大衆住宅の技術と意匠	III 1～4
La technique et l'esthétique des habitations populaires	
フェルナン・ボドソン (Fernand BODSON)	
(建築家、都市計画家)	
標準化 (規格化)	IV 1～6
La normalisation (standardisation)	
ユイブレクト・オスト (Huibrecht HOSTE)	
(建築家、都市計画家)	
低廉または大衆及び中流階級向け住宅街の技術と意匠	V 1～10
La technique et l'esthétique des agglomérations d'habitations	
à bon marché, populaires ou pour la classe moyenne	
ルイ・ヴァン・デル・スワールメン (Louis VAN DER SWAELMEN)	
(造園家、都市計画家、市町村連合技術部長)	
■会議における論議の報告 (Compte rendu des séances)	1～38

注) 実際の目次には役職等は書かれていないが、参考のため記入した。

館や劇場等の建設が住宅建設より優先され、家庭のやすらぎや公衆道徳を犠牲にしていること等を報告している。また、住宅政策に着手するため、すべての社会階級の住宅状況を把握する調査の必要性を強調している⁸⁾。

ヴォルウィルゲンは、都市部における労働者住宅の問題点とは、建物の過密や多層化による換気や日照不足と、人口過剰により狭い部屋に多人数が生活する等の不衛生であるとし、その理由は投機による土地の高騰のため住宅や家賃の価格上昇が起こったためとしている。よって都市部における労働者用の住宅問題は建設用地の問題、つまり不動産所有の問題に帰着すると指摘している。不動産投機により、土地は住宅建設や農業のためではなく商業のためとなったことについて、社会の改革を求める人々は、土地の値上がり分への課税や土地の現価格への課税による財産接收、ついには農地改革等の土地の公有化を提案しているのに対して、議論がまだ十分されておらず時期尚早と判断するとしている。

そこで対策として、以下のことを提案している⁹⁾。

①大都市の周辺部の現在の交通網から離れた場所で、公的機関が大規模な土地を購入する。都市計画に携わる者は都市の拡張政策を推奨している。この方法はドイツ、イギリス等多数の国でもなされている。②郊外での土地の購入には、交通政策と地域ごとの建築基準法 (règlement de bâtisse par zones) の制定が必要である。これは多くの人々が誤解しているように、工業地域や商業地域、高級住宅地等を指定するのではなく、土地の値上がりや不適切な利用により快適な居住条件が損なわれるのを防ぐためである。③土地の高密度利用は土地の価格を押し上げ、その地域の不動産政策に影響を与えるので避ける。④労働者に持家を持たせるべきではない。都市部では労働者自身が家主の家屋は細分化されて貸され、過密や家賃の高騰、不衛生の元となっている。しかし、借家人は自分の住む家屋を尊重しない。そこで、イギリスが既に適用している借家人協同組合方式を採用する。こうして住民にみんなで創ったものへの所属意識を育てる。借家人協同組合方式が賃貸方式と持家方式を併せ持ち問題解決に適している。また、住人による家屋や地区の無秩序な改変を防ぐために自治体の建築

基準を強化する。⑤労働者住宅 (habitations ouvrières) とは不適切な表現なので、田園地区 (quartier jardin) または田園都市 (cité-jardin) と呼ぶことが望ましい。

以上の報告に対して、彼の推奨する大規模開発は、低廉住宅公社等の国の援助を得た組織に土地の強制収容権を持たせることになる。その結果、地方自治体の自治権を侵害することになるとの論議が盛んに行われた。一方、複数の自治体にまたがる大規模開発での公社による調整の必要性も指摘された。

ヴァン・デン・ベンプトは、地主は土地からの収益だけを求め、住民の衛生や道徳は顧みないと批判し、労働者に持家を持たせる政策は、労働者は借金に必要な担保を持たず、有効に機能していないと指摘している。労働者住宅の建設を促進するために金融機関が融資を行う方式は中流階級に有利になるだけで、労働者に土地所有への憧れを持たせる結果となり反社会的であるとしている。

そこで、土地所有者による投機を排除するために、土地や労働者住宅を自治体の所有にするとしている。そして、土地を地区や地域組織に長期賃貸借方式で貸し出し、国や州、自治体による低金利の基金提供で労働者住宅を建設するとする¹⁰⁾。この施策は、学校の建設が教育を保障するように、住宅建設は家族の精神や衛生、道徳を保障するのでも意義であると述べている。

しかし、彼の提案には、国の負担が大き過ぎること等の批判が数多く出された。

ボドソンは、イギリスやドイツ、スイス、ノルウェーの住宅をスライドで紹介し、「住宅問題が解決し、衛生、道徳的に大きな前進がないと平和が訪れたとは言えない」と述べている¹¹⁾。そこでいかに良い住宅を少ない資金や時間で建設するかが問題だとしている。当時のベルギーでは、最低5万戸の住宅建設が必要で、その土地代や建設費、道路等の施設費の合計が、1920年の通常国家予算の半分に相当する10億フラン必要であると報告している。

建設資材や建築職人の不足、建築期間の短縮等の問題解決のために、規格化した新しい工業生産手法を開発することが必要とし、イギリスやオランダ、フランスのような住宅及び市街地に関する法律の整備が必要であるとした。

彼の発表に対する論議の中で、労働者を土地所有者にするか、また土地を共同所有にするかについて、参加者の賛否を明確にすることを求める意見が出されたことに對し、議長は、労働者住宅としては住宅団地 (ensembles) を採用すべきだと主張した。諸外国で行われている協同組合方式の「集団のなかの個人」、「全体の一部分の所有」を絶賛し、この問題が統合されていると述べた¹²⁾。これに對し参加者は長い拍手で賛同を示している。

また、建築資材を速やかに調達するために工場を国営化し、個人の利益より共同の利益を優先すべきだとの意見も出された。しかし、これには多くの反発も出された。

オストは、機械や車両、写真機、武器、衣類の製造等の他分野で広く認められている標準化を推奨している。戦争中に機械文明は大いに進歩し、改良されているのに対し、4年間の占領下でベルギーが世界的動きから取り残されていることを遺憾としている。標準化は、ブロックの寸法等の建築資材をはじめ、間取りや家具にも適用可能で、経済的であるとして、標準化のためには建築基準に関する法の整備が必要であるとしている。

一方、標準化された素材を使っても結果の善し悪しは、今まで同様に建築家の才能によるとし、「町並みの美しさは、もはや家ではなく統一された地区、都市となり、建築家の仕事は建物を建てることだけではなく、住宅や道路、地区の配置にまで拡大する」と述べている¹³⁾。その上で、建築物の個性主義が生んだ地方様式や民族様式は崩れつつあり、素材の普遍化により国際的な意識が目覚めつつあるとする。そして、労働者は自分の家が隣家と全

く同じでも不満はなく、すぐれた居住性と経済性を求めているだけだと述べ、規格化された住宅以外にこれをなし得ないとする。

ヴァン・デル・スワールメンは、都市部では既存の住宅数の数割に相当する新しい住宅地が必要であると見積もっている。そして多くの都市が主要道路に沿って不規則に拡大すると予測している。そこで「総合的に計画された施設としての低廉住宅地が必要であり、それは郊外への都市拡張や再編成を方向付ける機能を持つ」と述べている¹⁴⁾。そのために諸外国と同様な総合拡張計画や都市の拡張に関する法整備の必要性を指摘している。また、建て替え可能である家屋と違って、住宅地区は変更が困難であるため、最小限の居住性を持つ住宅と同様に、最小条件を新しい住宅地に設定すべきであるとしている。そして住宅内部と同様に快適で、美的に優れたタウンスケープを創造する必要があるとする¹⁵⁾。

(2) 会議内容の特徴の分析

まず最初に、社会、経済的視点から見ていきたい。

会議全般の社会的特徴として、戦争による住宅破壊や建設中断による危機的な住宅不足、建築資材の生産体勢や流通の混乱、職人養成の遅れ等、住宅建設をめぐる問題が非常に緊迫していたことがわかる。また当時の住宅不足数や建築資材の生産高等もはっきり把握できていなかったことが明らかとなっている。

都市の土地利用や経済的状况の特徴としては、中心部は合理的構造への転換が困難となっており、その根源的要因は土地所有にあるとしている。この土地所有から発生する投機を封じ込めるために、郊外部での用地取得や土地の共同所有、ゾーニング、経済的土地利用のための集団化等、様々な対策が提案されている。また、郊外での住宅建設推進の意見には反論が全くなく、人々の認識は一致していたと考えられる。一方で、既存市街地の再開発等の論議もなく、都市部を完全に見限り、郊外部ですべての問題が解決するとしている。都市と郊外という二者を対立させ、郊外こそ理想に満ちあふれているとシンボル化する動きはこの会議で公になったと考えられる。

社会的視点において、労働者に土地を取得させ家を建てさせるか、民有または公有の土地に住宅を建て賃貸とするかという二者の対立の妥協策として借家人協同組合方式が取り上げられている。そこで歴史的自治組織である市町村 (Commune) による公有化が提案されると同時に反対意見も多数出されている。労働者住宅の用地を国有とせず市町村有とするところに、ベルギーにおける伝統的自治体の重要性が、こうした論議の背景として表れている。

政治的な変革も進行していた。ベルギーでは伝統的に都市整備は地方自治体の役目であった。いくつかの自治体間にわたる計画ではしばしば利害が対立し計画が頓挫することもあった。例えばレオポルド二世は、逆にこの利害対立を国王としての権力を利用して調整し大きな計画を実行した¹⁶⁾。会議において、1919年11月に設立された低廉住宅公社に土地の強制収容権を持たせるかどうかが大変な議論を呼んだ。労働者の住宅建設の主導権を自ら持ちたい自治体と、公社を通じて直接に建設を促進しようとする国の対立が見られた。ここに中世以来の市町村による自治の伝統が揺れてきたことが伺える。この会議でも話題となった広範囲な都市計画及び国土整備法の整備は自治体の都市整備に関する自治権を剥脱していくこととなる。この会議では自治体からの批判はまだ出ておらず、また会議の参加者もこの対立に気付いていないと考えられるが、この会議の時期がその変革点であったと言える。

会議の報告の中で、しばしば諸外国の田園都市や法整備、建築や地区のデザイン手法が引き合いに出され、特にイギリス、そしてオランダの先進性が言及され、続いてドイツ、フランス等の合計8カ国が挙げられている点であるが、多くのベルギー人が戦争中にこれらの国へ避難した政治状況がひとつの理由として考えら

れる。大戦中には多数の造園、建築、都市計画家が諸外国へ避難し、各国の同業者達から学び、終戦後に帰国した¹⁷⁾。例えばこの会議の参加者のヴォルウィルゲンはフランスへ、オストとヴァン・デル・スワールメンはオランダへ避難していた。しかし、多数が避難し、ベルギーの亡命臨時政府まであったフランスを取り上げることが少なく、敵国であったドイツにも言及されている点などから、この時期にベルギーでは、イギリスをはじめ各国の田園都市の理念や手法の取捨選択が行なわれていたと考えられる。

続いて、技術的視点から見ていきたい。

都市域をいくつかの区域に分けて、それぞれの地域ごとに異なった建築、土地利用規制を行うゾーニングの考え方が体系的に示されたのはドイツで1893年のことである¹⁸⁾。以後ドイツ各地に普及している。ヴォルウィルゲンは、ゾーニングのもつ地価上昇抑制や環境制御等の効果を正しく理解しているが、ベルギーでは当時、普遍的な考え方ではなかったことが示されている。

次に、標準化によるほぼ均質な住宅の利用は、従来の建物配置の手法によると単純で無機質な街並みとなってしまう。そこで建築物一つ一つの個性に寄らず、その配置によって街並み(タウンスケープ)の個性を演出する手法を必要とすることになった。道路の線形計画や記念碑的な建築物を軸とした計画が先行するのではなく、道路計画、区画割り計画、建築計画等が同時に行われる必要が生じた。これは街並みデザイン計画のベルギーにおける誕生であると考えられる。おそらくヴァン・デル・スワールメンやオストがベルギーで最初にそれを理解した人物だろうと考えられる。この考えはアンウィンの行った、伝統方式を踏まえて住宅単体のデザインを抑え気味にし、これをグループ化することにより空間構成を行う方法、群居のデザイン¹⁹⁾に類似点が見られる。彼らがアンウィンを参考にしたかどうかは不明であるが、単体のデザインを抑え気味にした住宅を、標準化による均質な住宅に置き換えた手法である。

このような標準化により建物の個性がなくなってくると、地区全体の雰囲気や個性が重要になる。土地の共同所有により個人の個性は表面化せず、集団の性格となる。地域色や地味のない均質な材料の利用により個人主義を取り除き、平等で新しい共同体の創造を目指す。最低限の快適性を持った住宅や住宅地区の建設を行い無駄をなくする。このような動きが会議の中で、特に技術者達からしばしば言及されている。これは機能的都市や国際様式²⁰⁾の理念と一致する。近代主義のもつ禁欲的な標準設計の導入でもあった。シュトゥットガルトの工作連盟展で「最小限住宅」が主要テーマになったのが1927年、フランクフルトのCIAM第2回会議で「最小限住宅」が再び主要テーマになったのが1929年であることを考慮すると、多くの文献でこの1920年の会議を田園都市論の導入が公式化された時点と位置付けているが、1930年頃以降にベルギーにも大きな影響を及ぼしたCIAM等の理念を受け入れる素地は既に技術者を中心に出来ていたと考えられる。この会議は新しい住宅像を目指し始めた変革点であったと考えられる。

ところで、この会議における田園都市についての捉え方について検討して見たい。マンフォードは、以下のような項目をワードの提案の特徴として取り上げている²¹⁾。①農業として使用される永久空地帯を設置し、都市の無秩序な発展を制限すること。②土地は個人所有に分割されず、統制され、個人は借地として利用すること。③統制ある成長と制限ある人口。④利益をコミュニティへ還元すること。⑤自立を可能にする産業を新しい都市地域へ移動すること。⑥一つの新しいコミュニティが機能し始めると次のコミュニティ建設を目指すこと。

この会議のなかで明らかに同様な提案がなされているのは、②と④であり、①は都市発展の制限について部分的に言及されている。しかしその他の部分は触れられていないことから、この当時

から自立し、制限ある都市像を目指していなかったことがわかる。

(3) 社会的背景から見たそれらの特徴の意義

まず、戦後の諸問題の早期解決の必要性が以後の方策を決定付けている。そして、過去の慣習を大変革する契機は戦後の危機的状況であったことがわかる。

また、外国の先進性との比較により、ベルギーの遅れを強調する発言が多く見られるのは、ベルギーが4年間の占領等で実際に周辺の国々より遅れていたためと、戦争中に海外へ避難した人達により国際的な視野が広がっていたこと、そして復興を急ぐために有効な手段であったと考えられる。この諸外国から遅れているという焦りが新しい理念導入の推進力だったとも考えられる。

そして、労働者住宅用地の共同所有や協同組合方式の考え方は、企業の国有化の提案と同様に社会主義思想の社会的所有、集団的所有の概念に基づいていると考えられる。これらが積極的に進められた背景には、会議前年の1919年の総選挙で、社会主義政党である労働党が大躍進を遂げ、僅差で第二党²²⁾となっているように、社会主義勢力の拡大も大きな要因であったと考えられる。

ところで、これまでの会議内容の特徴の分析から、この時期の低廉住宅の建設に求められたのは、経済性、衛生性、道徳性であったと考えられる。この会議の中で「経済」、「衛生」、「道徳」という言葉が頻繁に使われていることからこのことが示される。

まず第一に経済であるが、戦後の住宅不足を打開するため、短期間で安価に大量に住宅を建設する必要があった。この経済性を追求するために、都心部での土地取得の放棄、郊外部での土地購入、大規模な面積での開発、合理的な土地利用が可能な団地方式、地価の抑制効果を持つ土地の共同所有、建築家や技術者による新たな素材や工法、配置の研究等が考えられた。

次に、衛生であるが、戦前からあった劣悪な労働者住宅の問題を引き続き解決していく必要があった。緑が多く日当たりが良く、快適な環境に住居や家庭を持たせることが理想とされた。労働者が憧れる住宅形態は、裕福な者の別荘風住宅と同様な郊外の一戸建であったと考えられる。しかし、より合理的で経済的で、同様な魅力がある数連戸やテラスハウス形式が推奨された。

そして、道徳であるが、為政者達には起こりうる革命へ危機感があり、社会の治安維持をはかる必要があった。労働者に上記のような衛生的な住宅を与え、温かい家庭生活の中で満足させることで、社会の現状批判を弱める効果が期待された。土地の共同所有や団地方式は、行政側としては住民を把握し、管理するのにも好都合であった。賃貸方式では、公共の物は大事にされないが、協同組合方式として経営に部分的に参加させれば内発的に大事にされることが期待できた。

(4) 結論

低廉住宅全国会議の論議から、労働者の生活改善のために快適な住宅を望む社会主義者や共産主義者、治安維持を望むために労働者住宅の建設を行う為政者、新しい実験場を求めた建築家、この3者の妥協点が田園郊外の導入であったことがわかった。そして、社会秩序維持の為の持家政策と私有財産制を古い考え方とする社会主義的な土地の公有化の妥協点が借家人協同組合であった。

また、従来からある都市部の集合住宅を悪とし、各国で評判の田園都市を理想と掲げ、問題解決に取り組んだ。このように目指すものを明確化することで、短期間で経済的に大量の住宅建設を能率よく推進しようとしたものと考えられる。

このようにして、都市近郊の未開発地域で、住人の共同組織を持った田園郊外の建設が急速に着手されたと考えられる。しかしながら、量の充足が最大の課題で、従属的に都市や地区全体の計画の質が問われ、居住者にとっての生活環境の質は限定的に抜われていた。

4. 「田園都市に関する特別基準法」案

1920年頃より、低廉住宅公社や自治体等の主導、後援によりベルギーの各都市の郊外で住宅地が建設され始めた。そのような状況の中で、1925年にベルギー市町村連合は、田園郊外の都市計画や建築基準策定の要綱として「田園都市に関する特別基準法」(Règlement Différentiel sur les Cités-Jardins) 案²³⁾の発表を行った。実際の作成は5人メンバーからなる小委員会で行なわれている。スキュルベーク区役所の総務部長のフォルタン(Fortin)が委員長を務めた。その委員の一人で、前述の低廉住宅全国会議でも報告した造園家、都市計画家で市町村連合技術部長のヴァン・デル・スワールメンは、法案作成に重要な役割を果たしたとされる²⁴⁾。彼はこの基準法案が出版される1925年には既に、5カ所の田園郊外の計画を実際に手懸けている²⁵⁾。

この法案発表の趣旨は、美的に優れた田園都市の維持に必要な規則を全市町村に普及することであるとしている。そして、公衆の衛生や安全を保障するために、各自治体は公共道路や建設に関する規則を定めることができ、憲法上問題のないことを確認している²⁶⁾。

(1) 法案の概略

全部で42条からなる。取り上げられた項目のすべてを表-2に示した。一つの項目に何条かが充てられている場合もある。

重要な項目について内容の概略を以下に示した。

まず、外壁の後退義務については細やかに規定している²⁷⁾。例を挙げると、それぞれの建築線を道路から5mの後退とし、後退部分は庭として利用し、庭の50%以上を植栽や花壇、芝生地

表-2 「田園都市に関する特別基準法」案の項目一覧

- I. 外壁の後退 (Zone de recul)
 - ①後退義務の設定 (Établissement de la servitude)
 - ②後退部分の整備 (Aménagement de la zone)
 - ③地盤高 (Niveau)
 - ④地下室 (Caves)
 - ⑤排水口 (Puisard)
 - ⑥物を置くこと (Dépôts)
 - ⑦非建築地 (Terrains non bâtis)
 - ⑧庭の伸展 (Extension du jardinier)
 - ⑨袋路 (Enclos)
 - ⑩閉障 (Clôtures)
- II. 外壁を後退させた建築 (Construction dans la zone de recul)
 - ①連棟住宅数の制限 (Limitation du nombre de maisons contiguës)
 - ②建物用途の制限 (Restrictions à la destination des bâtisses)
 - ③適用外 (Empiètements autorisés)
 - ④突出部とテラス (Avant-corps et terrasses)
 - ⑤階段、段差 (Marches)
 - ⑥玄関の階段 (Perrons)
 - ⑦建築物の高さ (Hauteur des bâtisses)
 - ⑧ひさし、屋根 (Marquises-Auvents)
 - ⑨建造物の外観 (Aspect des constructions)
 - ⑩壁の厚さ (Épaisseur des murs)
 - ⑪開口部の敷居 (Seuils des baies)
 - ⑫手摺りと屋根 (Balustrades et couvertures)
 - ⑬戸、窓の外開き (Ouverture des extérieurs des portes et fenêtres)
 - ⑭給排水設備 (Installations sanitaires)
 - ⑮維持 (Entretien)
- III. 建造物の外観 (Aspect des constructions)
 - ①承認 (Autorisations)
 - ②評価基準 (Règles d'appréciation)
 - ③切り妻の装飾 (Décorations des pignons)
 - ④看板 (Enseignes)
- IV. 道路の設置 (Établissement de la voirie)
- V. 区画割り (Lotissements)
 - ①小区画地の面積 (Dimensions des parcelles)
- VI. 水道、ガス、電気、下水の配管、配電 (Canalisations d'eau, de gaz, de l'électricité et d'égouts)
- VII. 適用除外 (Dérégations)
 - ①諮問委員会 (Comité consultatif)
 - ②違反と違警罪 (Infractions et contraventions)

表－3 最低区画割り面積

	敷地幅 (m)	面積 (㎡)
1戸建	16	400
2連戸	22	550
3連戸	28	700
4連戸	34	850
5連戸	40	1,000

表－4 最低区画割り面積から算出した D/F 比と戸数密度

	1戸間口 F (m)	奥行 D (m)	D/F 比	1戸の面積 (㎡)	ヘクタール当たりの戸数		
					住宅地率70%	住宅地率60%	住宅地率50%
1戸建	16.0	25	1.6	400	18	15	13
2連戸	11.0	25	2.3	275	25	22	18
3連戸	9.3	25	2.7	233	30	26	21
4連戸	8.5	25	2.9	213	33	28	23
5連戸	8.0	25	3.1	200	35	30	25

として利用しなければならないこと等である。また、袋路について、車が通る場合（クルドサック）も通らない場合にも、袋路端部の周囲に建物は20m以上離れて建築し、十分に日照や緑地が得られることと規定している。そして、壁面後退部分と公共道路の境については、囲障の種類、設置位置、高さ等について規定している。

次に、外壁を後退させた建築については、各住宅の全ファサードに通風と日照がなくてはならないとし、住宅の連棟は5戸以下、裏庭の奥行については5m以上としている。決められた場所以外での商業、工業用の建物、また住宅の裏に衛生や美観を損なう恐れのある作業所を建てることを禁止している。そして、建物の高さについては、公共道路に面した地面から、屋根の頂部までが13m以下としている。

また、道路の設置については、16種類の道路断面を提案している。いくつかの断面では最低の壁面の後退距離を指定している。

区画割りについては、最低の住宅用地面積を設定している（表－3）。例えば1戸建の場合は間口が16m、面積が400㎡、5連戸の場合は5軒分の敷地幅が40m、面積が1,000㎡等となる。

(2) 法案の特徴の分析

全体を見渡したとき、外壁の後退、つまりセットバックについての記述が多い。建築線を遵守した上での壁面後退とその部分の緑地化を強く提案するとともに、道路断面の種類ごとに壁面後退の寸法を提案することも行っている。ベルギーでは、1914年に定められた法（La loi du 28 mai 1914）により、行政は道路景観を守る上で必要な場合には、壁面後退の設置を義務付けることが可能になった²⁸⁾。今回の法案でもその延長線上にあり、それを推し進めようとしていることがわかる。

また、各住宅地の間にオープンスペースを設け、通風、日照を確保することや、連棟数の制限、給排水設備等の設置に気を配ること等、住宅地における衛生を強く考慮していることがわかる。

ところで、提案された最低区画割り面積における敷地幅、住宅用地面積から、D/F比（敷地の奥行を間口で割った値）、1戸当たりの敷地面積、ヘクタール当たりの戸数（住宅地率70%、60%、50%を想定）を算出してみると、表－4のようになる。

イギリスの田園都市、郊外住宅地計画で著名なアンウィンは、理想的な住宅地として、1エーカー当たり12戸、つまり1ヘクタール当たり約30戸の低密構成を推奨している²⁹⁾。西山康雄氏がより詳細に算出した値³⁰⁾によると、そのとき、住宅地率70%で敷地面積233㎡、住宅地率60%で敷地面積200㎡となっている。実際の提案（アンウィン・パターン）では、ヘクタール当たりの住戸密度約38戸、住宅地率61%で一戸当たりの敷地面積161㎡、D/F比5.4となっている。

この法案では、D/F比は1.6～3.1とアンウィンの提案より幅の広いものとなっている。一戸当たりの敷地面積は400～200㎡とアンウィンの提案より全体として大きい。ヘクタール当たりの戸数は35戸（住宅地率70%）以下と考えられ、アンウィンの提案以下の低い密度となる。このように、この提案では、間口幅

表－5 ブリュッセルの田園郊外の戸数密度

田園郊外名	戸数／ha	住棟形式
ロジ	36	2～数連戸
シテ・モデルヌ	42	2～数連戸
フロリアル	38	2～数連戸
ジョリ・ボワ	35	2～数連戸
カベルヴェルド	15	2～数連戸
上記5地区の平均	33	-
全体22地区の平均	51	-

を節約せず、かなりの低密を目指したものとなっている。

ここで、第一次世界大戦後にブリュッセルで建設された22カ所の田園郊外（faubourg-jardin）と、その中でヴァン・デル・スワールメンが計画に関与したブリュッセルの田園郊外5カ所（ロジ、シテ・モデルヌ、フロリアル、ジョリ・ボワ、カベルヴェルド）の戸数密度と住棟形態を取り上げてみる³¹⁾。

表－5に示したように、実際の田園郊外の建設においては、全体22地区の平均では51戸／haとかなり高密である。またヴァン・デル・スワールメンの関与した計画でも、カベルヴェルドが例外的に15戸／haである以外は提案より高密である。また、住宅の連棟については、法案では5連戸以下としているが、実際の建設では、2～数連戸まで幅があり、場合によっては10連戸を越えるものも含まれている。この法案には連棟を5戸以下に制限した住宅建設を勧めようとする意図があったと考えられる。

以上のように検討してみると、かなりの低密度の住宅建設を目指していることが明らかとなる。上記のブリュッセルで建設された田園郊外では既に居住者に勤め人が多く含まれている³²⁾ことを考慮すると、一般的により低所得層である労働者用の低廉住宅としては実現不可能な数字を挙げていると判断できる。

(3) 低廉住宅全国会議に対するこの法案の意義と結果

まず、戦後の数年間で住宅建設が進捗し、低廉住宅全国会議で報告された危機的な住宅不足はある程度解決し、快適な住宅や道路、住宅地域の建設を試みる余裕が出来てきていると推測される。しかし法案の対象は、かなり低密度を目指していることから、会議で論議された低廉な労働者住宅ではなくなったと考えられる。

また、会議で確立が望まれた建物の標準化、建築計画、道路計画等に対応してこの法案が提案されている。しかし、地区計画の範囲を越えてはならず、会議で論議されたような田園郊外の建設による都市全体の拡張計画までには至っていない。

そして、商業、工業的利用については、建物に関する制限以外は触れられておらず、この法案は用途の混在を避けた全くの住宅地だけを対象としていることが明らかであり、この頃には田園都市論のもつ自立性等は全く考慮されていないことが確認できる。

(4) 結論

低廉住宅全国会議の論議において、田園都市は危機的な住宅不

足を解決する理念や手法の理想像として掲げられた。しかし、田園都市の理念からは、土地所有の制限と協同組合の方式だけが、社会秩序維持に有効で経済的である面から特に注目された。

危機的な住宅不足が収まるのに伴って、緑豊かで快適な住宅地の価値は、田園都市論や田園郊外の計画手法の受容に伴って以前より高められ、より快適な空間構成が求められるようになったと考えられる。このようにして、田園郊外のもつ低層低密な構成手法は、外壁の後退義務の徹底化等、既に評価のあった住宅地の計画手法との融和がなされ、一般的な郊外住宅地の計画手法にも普及していくこととなったと考えられる。

一方、田園郊外の手法は、労働者向けの低廉住宅としては用いられなくなりつつあったと考えられる。前述のように、既に田園郊外には、労働者だけではなく、より豊かな階層も居住するようになっていた。また、当時のいくつかの自治体では、社会主義政党の支持層である労働者のための高密度な住宅の受け入れを敬遠し、より程度のいい中流向けの住宅建設を望む動きがこの頃見られている³³⁾。このことから、この法案は実際に各自治体で建設されつつあった、田園郊外だけではなく一般住宅地を含めたすべての郊外住宅地で、より豊かな所得層をも招致できるような快適な居住環境を形成する目的で提案されたと考えられる。戦後すぐには労働者用の低廉住宅として推奨された田園郊外が、一般的な郊外住宅地の計画手法に変革した時期を特定することはより詳細な検

討を要するが、1925年頃には既になされていたことがこの法案から明らかになっている。ところで、中産階級等の郊外住宅は、一般に持家として建設され、協同組合方式は不要とみなされる場合が多い。このことが、1925年頃以降には、既に始められた田園郊外建設の継続はなされたが、住人の共同組織を持った新しい田園郊外の建設がほとんど着手されなくなった理由と考えられる。

今後の課題として、この法案が実際の市町村における条例等の作成時にどのような影響を与えたかを検討する必要がある。

5. おわりに

この研究で明らかになったことは以下の通りである。

- (1) ベルギーにおいて田園都市の理念は部分的に受容された。また、田園都市は効率の良い住宅建設の理念や手法のシンボルであった。
- (2) 低廉住宅全国会議は、機能的都市や最小限住宅の理念を持った新しい住宅像を目指し始める変革点であった。
- (3) 「田園都市に関する特別基準法」案の趣旨は、田園郊外の持つ低層低密構成の手法をすべての郊外住宅地の計画手法へ普及することで、対象は低廉な労働者住宅ではなかった。
- (4) 1925年頃には田園郊外の手法は、一般的な郊外住宅地の計画手法に変革していた。

補注および引用文献

- 1) 平岡直樹・佐々木邦博・伊藤精悟 (1998): 20世紀初頭においてブリュッセルに建設された田園都市の特徴: ランドスケープ研究 61(5), 455-458
- 2) Ibid., 1).
- 3) STYNEN, Herman (1979): *Urbanisme et société*: Pierre Mardaga éditeur, Bruxelles-Liège, 39
- 4) SMETS, Marcel (1977): *L'avènement de la cité jardin en Belgique*: Pierre Mardaga éditeur, Bruxelles-Liège, 106-108
- 5) Ibid., 4).106
- 6) UVCB (1920): *Conférence nationale de l'habitation à bon marché*, Bruxelles 24-26 avril 1920, pub.12: Bruxelles, 102pp
- 7) UVCB, op.cit., 6), *Compt rendu*, 3-4
- 8) UVCB, op.cit., 6), *Rapports*, 6
- 9) UVCB, op.cit., 6), I, 6-8
- 10) UVCB, op.cit., 6), II, 1
- 11) UVCB, op.cit., 6), *Compt rendu*, 27
- 12) UVCB, op.cit., 6), III, 17-18
- 13) UVCB, op.cit., 6), IV, 5
- 14) UVCB, op.cit., 6), V, 4
- 15) UVCB, op.cit., 6), V, 5
- 16) 平岡直樹 (1995): *ブリュッセルの都市近代化における国王レオポルド二世の役割*: 都市計画論文集 30, 301-306
- 17) 同上書, 文献7)
- 18) 都市計画教育研究会 (1987): *都市計画教科書*: 彰国社, 34
- 19) 西山康雄 (1992): *アンウィンの住宅地計画を読む*: 彰国社, 80
- 20) 国際様式(international style)近代建築の多様な動向のうちで、個人や地域の特殊性を超えて、世界的に共通な様式に向かっているもの。1920年～1950年代ごろまでの近代建築の主流をなす合理主義的造形様式をいう。建築大辞典 (1993): 彰国社, 561
- 21) マンフォード, L., 長素連訳 (1968): *田園都市理念と現代の計画: 明日の田園都市*: 鹿島出版会, 57
- 22) 第一党がカトリック党で73議席、労働党が70議席、続いて自由党で34議席。HAYT, F. and GALLOYS D. (1997): *La Belgique: De Boeck & Larcier*, Bruxelles, 126
- 23) UVCB (1925): *Règlement différentiel sur les Cités-Jardins*, pub.24: Bruxelles, 30pp
- 24) SMETS, Marcel, ed. (1985): *RESURGAM, La reconstruction en Belgique: Crédit Communal de Belgique*, Bruxelles, 230
- 25) STYNEN, op.cit., 3), 128-129
- 26) UVCB (1925), op.cit., 23), 3-8
- 27) UVCB (1925), op.cit., 23), 9-13
- 28) Ministère des Travaux Publics et de la Reconstruction (1958): *Le plan vert*: Bruxelles, 56
- 29) UNWIN, Raymond (1912): *Nothing gained by overcrowding!*, in Creese, W.L. (1967): *The Legacy of Raymond Unwin: A Human Pattern for Planning*: The MIT Press, 109-126
- 30) 西山康雄 (1992): *アンウィンの住宅地計画を読む*: 彰国社, 65
- 31) 前掲書, 1)
- 32) 例えば、ロジは金融機関の従業員を中心に、フロレアルは印刷工を中心に借家人組合が設立された。
- 33) SMETS, op.cit., 4).142

Summary: In Belgium, the construction of a large number of garden suburbs began after the First World War. The Union of Belgian Cities and Communes, promoting the construction of garden suburbs, held "The national conference of cheap housing" at Brussels in 1920, and presented "The model of differential regulation on the garden cities" in 1925. By analyzing them, this study aims to reveal the interpretation of the concept of garden cities and the method of garden suburbs in Belgium. The question which garden city concept was paid attention the Belgique, suffered war damage, was the conception for land under public ownership or in trust for the community, or the formation of cooperative. These methods were considered to be economical, and effective in maintaining social order. After several years, the planning method for low-density low-rise gained in importance for the construction of general residential areas with amenities.